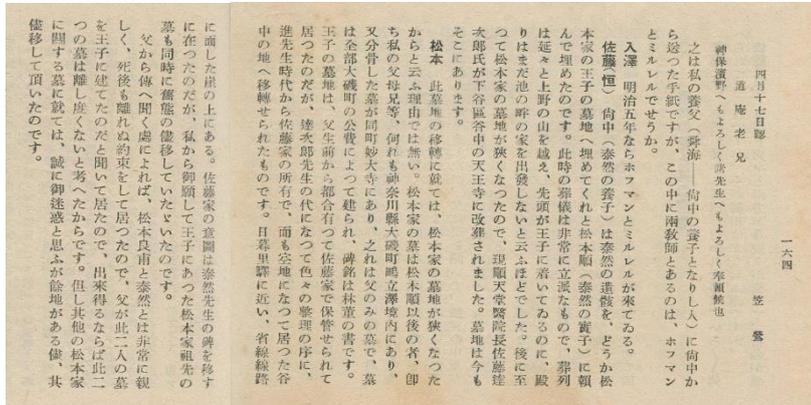


幕末明治の写真師列伝 第百十四回 内田九一 補足三

そこで僕はアプローチを変えてもう一度、松本順、長与専齋著、小川鼎三・酒井シヅ校注『松本順自伝・長与専齋自伝（東洋文庫 386）』（平凡社、1980年）と鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭時の生涯』（東京醫事新誌局、昭和8年）、日本医事新報社編『近代名醫一夕話 第1輯』（日本医事新報社、昭和12年）の記述を読み返してみることにした。現在の松本順（良順）のご子孫、松本和彦氏とは電話で何度か話をしたこともあるが、松本家も戦災などで古い資料は全て焼失しており、何もないことは知っていた。



日本医事新報社編『近代名醫一夕話 第1輯』（日本医事新報社、昭和12年）の記述

「……行徳に上陸せしに、太田の奥にせる脱人、其の主枝負傷して敗散したりと、終に會せし（蘭時）とある。太田の安否も気がかりであるが既に四面楚歌中の密行であるので良順一行は先を急いだ。

この江戸脱出の時良順は家族の者を松本累代の墳墓のある府下王子梶原村今の王子製紙会社のある處に移した、長男銈は當時十七歳であつ

てボートインに従つて和蘭に留學して居つた、大男橋一郎は高崎の門人服三石の元へ職取を逃れて居たので王子に避難したは義父母夫人及び生れたばかりの三男蘭之助の外家族使用人数各であつた。

「王子の直ぐ前は御承知の飛鳥山だ、こゝに船島の兵隊が陣を構へて居つて、實弾かそれとも響かしの空弾か判らぬが時々バンバンと打ち下したものだ、それに時々細切れ共が山を下りて來て、陽に焼けた黒い顔か底光のする鋭い眼をきよ／＼とさへ覗くかばきよ／＼と云ふて何にもせん、少しも怖はかなければつてん、大將の留守に來る「裏所の者ちやあ、わは、」なんて縁側に腰かけては内を覗き込み、荒くれたつた手で刀のつばなど捻り廻すので女達はおびえきつて居たものだ。」（松本棟一郎翁談）

鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭時の生涯』（東京醫事新誌局、昭和8年）の記述

この時、王子、十条、豊島の三ヶ村の者と用水について示談の斡旋をした人物は、大谷倉之助と鹿島糸器械所（元々は東京傳馬町の木綿問屋）の鹿島萬平であつた。製紙工場を建設するについて最も重要な問題になったのが用水だったからである。

抄紙会社工場の場所の選定では、谷敬三、櫻井漸、増田安久、鹿島岩蔵らがかかわっていた。

鹿島岩蔵は横浜で西洋建築の請負業者として実績を上げていた人物で、山東直砥と一緒に東京近郊の土地の選定を行い、候補地を探し回り、大蔵省にいて抄紙会社工場建設の指導をしていた渋沢栄一に報告していた。

山東直砥は内務省の官吏から神奈川県参事となった人物（明治8年（1875）、神奈川県参事辞職）で、その当時、渋沢栄一の秘書のような役を果たしていた。そのため神奈川県参事の定式請負人3人のうち1人だった鹿島岩蔵とは旧知の仲だったのである。

また、山東直砥は文久年間より松本良順の食客、門人の1人でもあり、渋沢栄一、鹿島岩蔵、山東直砥、松本良順と、これらの人間関係も繋がっていることがこれで判った。（つづく）

（森重和雄）